

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第10回

第4章 宮川ひろ

その1 「地図のある手紙」、『春駒のうた』

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまみきみこさんのことを書いた。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書いたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969年）のころまでを述べている。

第4章では、宮川ひろ（1923～2018年）のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返る。母もまた、私の出会った児童文学者にほかならなかった。

Sからの電話

ある日、母に甥のSから電話がかかってきた。前川康男先生から手紙（葉書ではないかと思う）が来て、それには、あて先の住所のかわりに地図が描かれていたという。

Sは、JR（以前は国電）神田駅にほど近い場所で、おでん屋を営んでいた。母がその店に『びわの実学校』の編集同人の先生がたを案内したらしい。前川先生から届いたのは、そのときの礼状だった。表書きに神田駅からSの店「神田 一平」までの道すじが描かれていて、郵便屋さんは、その地図をたどって来てくれた。これが、母の短編「地図のある手紙」のアイデアになった。母は、のちに、インタビューで「地図のある手紙」に関する質問にこたえて、「『るすばん先生』を出版したあと」のことと知っている（「作家に聞く／宮川ひろさん 心のふるさととは「二十四の瞳」」『季刊文学教育』1978年7月）。

「地図のある手紙」は、童話雑誌『びわの実学校』第40号（1970年4月）に掲載された（久米宏一絵）。（注）『るすばん先生』が刊行されて、母が先生がたをSの店にご案内したのは、1969（昭和44）年10月24日の出版記念会もおわったあとだろうか。前川先生の手紙は、69年秋のおわりごろということになるから、母の執筆時間は短い。一気に書けた作品なのだろう。

「地図のある手紙」の主人公は源さんだ。

源さんは、去年で五十をすぎた。村の郵便局へ勤めて三十年余りになる。

吉野地区の受け持ちになってからでも、十年近くになるだろうか。この地域には沼の原がふくまれるので、若い人からは敬遠されて、交替してくれる者がなかった。

沼の原は、吉野から三キロ近くも山の中へはいる。人家は十戸足らずの開拓村であった。

（引用は日本児童文学者協会編のアンソロジー『地図のある手紙』小峰書店 1986年による。以下も同じ）

ひどい吹雪の朝、いろりの中で膝の上まである深い長ぐつをはいて出勤した源さんは、手紙の束をよりわけながら、「こんな日には、正直、沼の原がねえと助かるがなあ——。」と思う。ところが、1通あった。「××県××郡××村吉野字沼の原 山上圭治様 きよ子様」——圭治は、半年前に東京の地下鉄工事で事故死している。きよ子のほうは、二年前に病気で亡くなっていた。源さんが粗末な茶封筒を裏返してみると、差出人は「東京都 江東区 ……高田様方 山上 一郎」、亡くなったふたりの一人むすこだった。源さんは、声をあげそうになる。もう一度、表を返してみると、あて名の下の方に細かい地図が描いてある。沼の原の入口の一本杉の下の墓地への地図だった。

なにごとかあったにちがいねえ——。

心のどこかで、いつでも心配していたことが、とうとうおこってしまったような気がした。

源さんは、だれよりも早く、だまって郵便局を出た。もう吹いてくる雪も風も、冷たくはなかった。

きよ子が亡くなったあと、一郎は、出かせぎの圭治といっしょに東京で暮らすようになった。沼の原の小さな家はたたまれた。その圭治も亡くなって、きよ子の父の大作どんは、お骨だけはもって帰って、むすめと同じ墓に入れてやったけれど、孫の一郎は引きとってこなかった。一郎は、前から夕刊だけをくぼっていた新聞販売店にかわいがられて、手伝いながら、学校にかよっているという。小学6年生になっているはずだ。

今川橋交差点あたり

「地図のある手紙」から半世紀あまりがすぎた。私には年のはなれた従兄にあたるSの店が神田にあったのも、およそ30年前までである。店は、どこにあったのか。私は、学部の子のころに友だち数人と一度行ったことがあるだけだ。このとき、Sはいっさいお金をとらなかつたから、私は、行きにくくなって、そのあとは行かなかった。

Sの姪のMに電話をした。Mは、私より何歳か年下だが、大学生のころ、そして就職してからも、ときどき店に行っていたようだ。もううまく場所を思い出せないけれど、今川橋交差点のあたりだったという。ゴールデンウィークになる前の平日の夕方、店のあとをたずねて行ってみた。

駅を出たら、今川橋交差点はすぐに見つかったけれど、Sの店がどこにあったのかは皆目わからない。しかし、この交差点付近なら、神田駅の東口からも南口からも3分程度の場所であることはわかった。葉書の表に神田駅からの地図を描くこともできるだろう。そう確認できたけれど、立ち去りがたくて、交差点近くの居酒屋

屋に入ってビールを呑むことにした。

「地図のある手紙」の源さんは、吹雪のなかを歩きながら悩む。――「墓地へもっていったところで、死人が読めるわけもなし、これはやっぱり大作どんのところへ届けるべきもんかなあ……。／大作どんに届けていい手紙だったら、一郎だって大作あてに書くはずだ……。それを地図まで書いて、死んだ人のところへ持っていけっていうのだから――。」「一郎のやつ、源さんが配達する、って知ってのことなんだ――。」一郎は、赤ん坊のときから、だいてやった子だった。

源さんは、雪の上に顔を出している、うすっぺらな卒塔婆の前で、とうとう手紙の封を切る。――「圭治さんよ、おれがかわりに読むでなあ、よく聞いててくれよ。」便箋2枚だけの短い手紙だった。

とうちゃんとかあちゃん。

東京も雪がつもりました。つもったといっても、ほんの十センチたらずなのに、みんなは大きすぎです。あぶなくて自転車は使えないので、肩からひもでかかえて配りました。

ぼくもだんだん受け持ちがふえて、毎朝二百けん配ってから、学校へいきます。

一郎の手紙は、「寒い日には、沼の原で、かあちゃんをつくってくれたおろしじんだが食いたくなります。」とつづく。新聞販売店のおぼさんに作り方を話したら、さっそく作ってくれた。――「みんながおいしいっていったけれど、やっぱりかあちゃんがつくってくれた味とはちがっていました。／でも、とっとうまかったです。」手紙は、「何か話したくなったら、また書きます。／さようなら」とむすばれる。声に出して読んだ源さんは、「一郎のぼかやろうめ、つまんねえものをくいたがって……。ほんもののおろしじんだを食いにけえってこい――。」と思うのだ。

渡辺増治先生と「やつで会」

「地図のある手紙」は、母の故郷の村を舞台にしている。母は、群馬県利根郡東村で生まれ育った。尾瀬に近い山里である。源さんや、おかみさんのおかねさんが話すのも、ふるさとのことばだ。

母は、先のインタビューで「手紙を出したいという気持ちはあったんです。いなかには兄嫁しかいないわけでしょう。両親も兄も亡くなっていて、ほんとはお墓へ直接したいわけです。でも、出したら兄嫁のところへ行くだろうと思うのね。」（「作家に聞く／宮川ひろさん」前掲）と語っていて、一郎の手紙には、自身の望郷の思いが重ねられている。

だが、一郎が「さけの頭を入れたみそしるの中へ、おろしぎわの大根おろしをたっぷり入れるだけ」とおぼさんに話した「おろしじんだ」は、母の村のものではない。新潟の郷土料理のはずだ。これは、渡辺増治先生（1924～2016年）に教わったのだと思われる。

私がたぶん小学3年生のころ、当時の東京都板橋区のがが家の前の道をへだてた、ななめ向かいに、渡辺増治先生のお宅が引っこしてこられた。増治先生は、当時は練馬区の小学校におつとめで、文学教育の著名な実践家、のちには、日本文学教育連盟の常任委員長になる。『詩のなかの子ども』（鳩の森書房 1980年）をはじめ、多くの著作もある。先生は、新潟県の生まれで、高田の第二師範学校の卒業だ。

2016（平成28）年に増治先生が亡くなったとき、母ももう93歳だったが、日本文学教育連盟の機関誌に追悼文を寄せている。「渡辺増治先生には、どれほどお世話になったことでしょうか。／先生との出会いはご近所付き合いからでした。」（宮川ひろ「ありがとうございます」『文学教育』2016年12月）——こう書きはじめられる。

そのころ小学生だった息子の友達数人と、その母親同士が協力して、手持ちの本を読み合ったり日記を書かせたりしていたのですが、どんな本がいいのかなどわからないままの、なかよし読書会でした。そこで近所のよしみに甘えて、渡辺先生にご指導をお願いしたところ、こころよくお力をかしてくださったのです。（同前）

そのころ私はひよんなことから書くということに出会って、そっと習作の投稿などしていたのですが……。なんとかすこしずつまとまったものが書けるようになって『るすばん先生』や『春駒のうた』では不安なままに先生に見ていただきました。読みにくい生原稿に目を通してくださって、貴重なご助言をいただけたお蔭の出版でした。（同前）

追悼文にある読書会は、「やつで会」といって、小学生のための作文と読書のサークルだった。母をふくめて数人の母親を中心に運営され、ガリ版印刷の文集『やつで』もひんぱんに刊行されたし、遠足などの行事も行われた。発足は、私が小学2年生の1962（昭和37）年だが、渡辺増治先生が指導者として入ってこられたのは翌年度だと思う。増治先生は、小学生だった私の先生だったのだ。

毎月1回の日曜日、板橋区の赤塚公会堂を会場に勉強会が開かれた。徐々にメンバーが多くなって、低学年、高学年の2部会になった。私たちが持ちよった作文や詩を増治先生が講評してくれた。しばしば読み聞かせもあった。先生は、子どもが詩を読んだり書いたりする詩教育の専門家だから、大関松三郎の詩集『山芋』（百合出版 1951年）などを熱心に紹介してくださった。絵本で印象に残っているのは『だいくとおにろく』（松居直再話、赤羽末吉絵、福音館書店 1967年）だ。斎藤隆介の『八郎』（滝平二郎絵、福音館書店 1967年）も読んでくださった。

「やつで会」の活動をしていた時期に、母は、坪田譲治先生とも出会って、作品を書きはじめた。「やつで会」では、私たちの作文をとおして、子どものことば（思考）を獲得していったらう。そのことに、意味があったと思われる。渡辺増治先

生の子どものことばを見る眼や、子どものことばと付き合う姿勢から学ぶことも大きかったはずだ。

読んで読んで読んで『二十四の瞳』

母は、決して読書家ではなかった。「子どものころ、わたしは活字になじまずに育ちました。語りことばのように、すっと心に落ちるものしか読めないまま、年を重ねてしまいました。」（「母のことばを聞くように」『子どものしあわせ』1987年11月臨時増刊、引用は『母からゆずられた前かけ』文溪堂1993年による）と書いているのは、特に謙遜ではない。坪田譲治先生の著作や今西祐行先生をはじめ『びわの実学校』同人の先生たちの本は熱心に読んでいたけれど。

母が遺した、それほど多くはない蔵書のなかに、壺井栄の『二十四の瞳』がある。1952（昭和27）年に光文社から刊行された初版本だ。巻末の解説は、坪田先生の執筆である。挿絵を描いた森田元子の絵があったはずのカバーの失われた、はだかの本で、束がこわれて、テープで何重にも補修してある。母が読んで読んで読んで本のなのだ。（小学生のころ、私も、この本を読んだ。ぼろぼろのカバーがわずらわしくて、とってしまったのは私だ。）

母は、『『二十四の瞳』』（『月刊子どもの本棚』1978年2月）というエッセイで、岬の分校を舞台とする作品だが、「私も山の分校育ち」、「作品のなかにいる人びとが、そのまま私のふるさとの人びとであった」、作中の大石先生が分校へ赴任するのが昭和3年で、自分の分校への入学が昭和4年と、作品と自分との重なりを語っている（引用は『あて名のない手紙』メディアパル2007年による。以下も同じ）。『二十四の瞳』は、「語りことば」のようなものしか読めないという母の心に「すっと」落ちる文章でもあっただろう。

この本と出会ったころ、ふるさとの家では長兄が亡くなっていました。幼い子どもたち六人を残しての病死でした。夢中で生きている兄嫁のところへ、甘えて里帰りなどできない状況にありました。とって、焼けあとのバラックで世帯を持ったばかりの私にはこの姉を応援できるゆとりもありません。何年か私は生家へ帰れない日がつづきました。

そんな年月、私は何回『二十四の瞳』を読み返したか知りません。どの頁を開いても、帰ることのできないふるさとにつながりました。（同前）

母は、「この本は私にとって、ある一時期、ふるさといきの汽車でもあった」といい、「『二十四の瞳』というふるさといきの汽車に乗っていたころ、『春駒のうた』を書きたいという思いが、無意識なところで育っていたような気がします。」とエッセイをしめくくっている。母の思いは、「地図のある手紙」の一郎の思いである。『春駒のうた』は、ふるさとを思う手紙だったのかもしれない。

母の長兄が亡くなったのは、敗戦の年の3月である（母の父も、この年の2月に

病死している)。もちろん、『二十四の瞳』のころになっても、生家のたいへんな状況はつづいていた。エッセイのおしまいに補足すれば、『二十四の瞳』刊行の翌年に、母は、『春駒のうた』の先駆稿にあたるものを書いている。ただ、それが『春駒のうた』として書きあがり、偕成社から刊行されたのは、1971（昭和46）年になってからだ。『二十四の瞳』との出会いから、20年ほどものちのことである。

『春駒のうた』は、小児マヒで長く入院していた主人公の圭治がようやく村に帰ってきた場面からはじまる。おじい（祖父）とふたりでタクシーにのって戻ってきたのだ。

平^{へい}さんはハンドルを大きく右にきった。切り通しの道はそこでおわる。やっと平川橋のらんかんが見えてきた。

「お客さんよう、まっすぐいってもいいんだんべか。」

平さんはハンドルをにぎったまま、おどけた調子できく。

「右へまがるだよ。」

うしろの客席から、はしゃいだ声でこたえたのは圭治だ。

県道は橋のてまえで二本にわかれている。右の道は畑のなかをゆく村道である。

これは、まさに、母のふるさとの村の街道に入っていく情景である。（つづく）

（注）

「地図のある手紙」は、『地図のあるてがみ』のタイトルで絵本になった（斎藤博之絵、ポプラ社1974年）。日本書籍の小学5年の国語教科書で教材化されていた時期があり（1996年度版、2000年度版）、現在は、廣済堂あかつき発行の中学2年の道徳の教科書に掲載されている。